

## 質的研究－基礎：定義・特徴・量的研究との比較他

### 1. 質的研究の定義

- 自然な状態で、研究者と研究参加者が相互作用する中で行われ、言葉などの質的データを用いて帰納的に探究する研究である。(グレッグ他, 2007)
- 「意味・場・行為・文脈」といった概念を、研究対象とする。(竹内・水本, 2012)

### 2. 質的研究の意義

社会の急速な変化により生活世界が多様化することで、新しい文脈や視野に対応するには、演繹的方法（既存の理論モデルから設問・仮説を導き、実証的データと比較する）では対応しきれない。よって、実証的データから新たに理論を作る帰納的な研究の戦略が必要となる。この場合、知と行為は地域的(ローカル)なものとなされる。

### 3. 質的研究の特徴

#### ① 厚い／濃密な記述。(現象を再現できるデータ)

- 参加者の経験についての詳しい記述で、参加者の解釈・行為に関する感情や意味を明らかにする。
- データは数値ではなく、ラナティブのような形式の言葉(文字データ)が用いられる。

#### ② リフレクション

- 分析をする調査者の記録から、調査者が妥当な推論をしていることを証明するため。
- 研究者・研究対象者の主観性は研究プロセスのデータとみなされ、調査日誌などに書き留められて解釈の一部となる。

#### ③ データと分析プロセスの開示または明示

- 何のデータをどのように解釈したかを説明することで、質的研究の科学性の根拠を示す。単なる主観とならないために、データに基づいてどの部分からどういう解釈をしたのか、解釈を提示することが大切。→「反証可能性」を残すこととなる。

\*「反証主義」(Karl Popper)：設定された仮説が反証されなかった場合には、その仮説は成立するという考え方。ex)「私の主張は全て正しい」という原理的に反論できない記述は科学的論理性として認められない。

#### ④ データの第一義性

- 理論的枠組みがデータより先に決定されることはなく、データから理論を生み出すことに関係する。しかし、多くは現象に焦点を当て「現象の特質や構造」を記述する。
- 成果に焦点があたると同時に、過程にも焦点があたる。

#### ⑤ 研究対象者の視点とその多様性

色々な立場の関係者の持つ視点の多様性による様々な要素が、具体的な文脈から分離されず説明される。

#### ⑥ アプローチと方法の多様性

- 質的研究の理論と方法は様々な理論的アプローチ・方法に関連する。インタビュー、参加観察、既存の書類の検討など
- 1. 主観的な視点 2. 相互行為の形成と進行に焦点をあてるもの、3. 社会的フィールドの背後にある意味に着目し再構成を試みる方法がある。

#### ⑦ 相互作用

- 研究者と研究される人の相互作用がある
- データ収集と分析は同時に行われ、相互に影響する。 ex)インタビューで分析結果によって質問内容を追加など

#### ⑧ その他

- 「イーミック」な見方(「内部の者」の視点)：質的研究方法は社会的現実の主観的な性質に関係し、参加者の見方からの洞察を探求する。
- 研究している現象に集中的・長期的に関わる。
- 柔軟で融通性がある：データ収集を開始してからも、過程によって研究計画を変更できる

### 4. 量的研究との比較

#### 4.1 量的研究の限界

- 量的研究に満足できなくなったことから、質的研究が広まった。(Bryman, 2001—Holloway & Wheeler, 2006 より)
- 量的研究では、データや分析結果を数量化する研究、質問文を事前に標準化する方法、などにより、具体的なケースからできるだけ離れ、普遍的に当てはまるような形で結論が述べられる、形式が用いられてきた。  
しかし、実際には統計や実験には適さない研究対象や設問がある可能性があるため、量的研究が万能とはいえない。
- 社会諸科学の研究結果が現場で生かされていることが少ない。そこで、具体的な人・状況に結びついた知見を実証的データに基づいて生み出していくことを質的研究は目指す。

表 1-1 質的研究と量的研究の差異

	質的研究	量的研究
目的	参加者の経験と生活世界の説明 理解する データから理論を生成する	因果関係を説明するための調査 仮説検証, 予測, コントロール
アプローチ	幅広い焦点 プロセス志向 文脈に縛られる ほとんどは自然な場でなされる データに忠実である	狭い焦点 結果志向 文脈に左右されない しばしば人工的な場や実験室でなされる
データ源	参加者*1, 情報提供者*2 場, 時間, 概念などによる対象選 択の単位 目的, 理論的対象選択 研究中に発展する柔軟な対象選択	回答者, 参加者(「対象 subject」と いう用語は社会科学においては今 では用いられないようになっている) )*3 無作為抽出*4 研究開始前に選択方法が決定され る
データ収集	徹底的な非標準化面接 参加観察, フィールドワーク 文書, 写真, ビデオ	質問紙, 標準化面接 厳密な構造化観察 文書 無作為対照実験
分析	テーマ的, 継続比較分析 グラウンデッド・セオリー, 記述 民族学分析など	統計学的分析
結果	物語, 民族誌, 理論	測定可能な結果
関係性	研究者と直接深くかかわる 親密な研究関係	研究者のかかわりは限定される 隔てのある研究関係
厳密さ*5	真実性, 信憑性 典型性, 移転可能性	内的/外的妥当性, 信頼性 一般化可能性

(Holloway(野口), 2006, p.15)

#### 4.2 質的研究・量的研究両アプローチ

- 質的・量的、両方のアプローチが共に価値がある。数は質的研究でもたびたび用いられるし、量的研究でも質的な側面を含む。
- 「構造構成主義」：量的研究と質的研究のように、対立する科学観を克服し、双方に共有可能な新しい科学観を提示する考え方。
- 「関心相関性」：量的研究・質的研究かという選択は、研究対象に対して絶対的なものではなく、研究者の「関心」によって決定されるもの（だと、構造構成主義は考える）
- 「トライアングレーション」  
1つの現象に関する研究の中で、研究方法、データ収集方法、調査者、理論的視点が異なっているものを組み合わせるプロセス(例:質的方法と量的方法、面接と観察など)
  - ① データのトライアングレーション  
異なった集団、異なった場、異なった時期からデータを得る
  - ② 研究者のトライアングレーション  
2人以上の研究者がその研究に従事する

- ③ 理論のトライアングレーション(使用頻度は低い)  
一つの問題に対する研究で異なった理論的見方を適用する。
- ④ 方法論のトライアングレーション：最も用いられている
  1. 方法論内トライアングレーション  
ex)参加観察と自由回答の面接を1つの質的研究で使用する。
  2. 方法論間トライアングレーション：1つの特定の方法で集められた知見を別の方法によって確かめる。ex) 構造化された質問紙法を行う際、その妥当性を確かめるために非構造化面接もする場合)

#### 4.3 質的研究の種類

質的データの中でも「言葉」に限定した中での質的研究の主要な4つの種類。

##### (1) 言葉の特徴

- ① コミュニケーション手段として：内容・プロセス
- ② 文化の表れとして：語彙や意味の関係から研究する「エスノサイエンス」

##### (2) 規則性の発見

言葉は研究対象ではなく、研究しようとしている現象を伝達するものととらえられる。

##### (3) テキスト／行為の意味の理解

テキストや現象の本質を理解しようとする

##### (4) リフレクション

人々が意味があると思うイメージを作る、研究者自身の熟考に頼る、主観的プロセスに頼る、など。

- 今後の予定：プロセス、研究デザイン、研究手法、データ、質的研究手法を用いた英語教育関連の論文紹介など。

#### <参考文献>

Flick, U. (2002). 『質的研究入門—<人間の科学>のための方法論』(小田 博志, 春日 常, 山本 則子, 宮地 尚子, 訳) 東京：春秋社.

Holloway, I. & Wheeler, S. (2006). 『ナースのための質的研究入門—研究方法から論文作成まで』(野口美和子, 監訳), 東京：医学書院.

グレッグ美鈴・麻原きよみ・横山美江(編著)(2007). 『よくわかる質的研究の進め方・まとめ方—看護研究のエキスパートをめざして』 東京：医歯薬出版部式会社.

竹内理・水本篤. (2012). 『外国語教育研究ハンドブック』 東京：松柏社.(第17章)